吟友

会報 第四十二号

発行日　平成二十一年一月八日
編集人　南洲吟道会広報局
発行人　理事長　吉永洲神
発行所　〒一六五―〇〇三五　東京都中野区白鷺二―三四―五
㈳日本吟道学院南洲吟道会
☎・FAX　〇三（三三三〇）七〇〇九

輝かしい新年を迎えて

吉永　洲神

同志会員の皆様明けましておめでとうございます。ご家族お揃いでよき初春をお迎えの事と拝察致します。病気療養中の方、お具合は如何でしょうか。案じ申し上げております。どうぞくれぐれもご自愛の上療養に専念して下さい。

今年は本会創立三十五周年記念の輝かしい年です。十月三日（土）に練馬文化センターにて賑々しく記念大会を開催致します。どうぞ宜しくご協力の程お願いします。会場とりには、湊山冴龍・安永龍珀両理事お二人に絶大なご尽力を頂きました事をご報告して感謝の意を捧げます。

扨　昨年も亦皆様方のご活躍により輝かしい記録を留めました。即ち

一、九月二十一日（日）全国吟道大会（札幌）

合吟コンクール

第三位　女子チーム　岩井龍絢・川瀬龍慧・平松玉龍・大塚優祥・大塚厚水

第三位　男子チーム　村田重龍・佐藤峰龍・佐藤廣祥・猪浦雅水・肘岡宏水

一、十月十九日（日）吟士権者決選大会

◎漢詩六段以下の部

第三位　米長　優水（若鷺教場）

◎和歌・俳句の部

準優勝　米長　晃祥（若鷺教場）

第四位　菊田　正龍（龍暘会）

◎漢詩奥伝以上の部

優　勝　加藤　杏祥（白鷺教場）

第三位　湊山　冴龍（龍暘会）

◎漢詩六段以下の部

本部だより

平成二十年度秋季昇段審査　結果報告

右審査会が、十月二十六日（日）中野区白鷺会館に於いて開催され、受験者はめでたく合格されました。

少年の部	一級	一名	計　一名
	三級	一名	
一般の部	初段十一名	中伝　二名	八段　一名
	二段　二名	五段　三名	準師範　一名
	初伝　名	六段　三名	師範　三名
	三段　四名	奥伝　名	計　三十五名
	四段　二名	七段　三名	
	皆伝　一名	総伝　二名	総本部審査委員会をへて昇段
	九段　七名	正師範　四名	
	秀伝　五名	教授　四名	計　二十五名
	十段　二名	範師　名	

★新入会員のご紹介

次の方々が入会されました。どうぞ宜しく。

1、藤沢　恒水（三　菱）（再入会）
　　会員No.七五七（二〇、七、七付）
2、米田こず絵（若　鷺）会員No.七五八（二〇、一〇、二付）
3、中野　佑子（中町会第三）会員No.七五九（二〇、一〇、二付）
4、吉本　慶子（中町会第三）会員No.七六〇（二〇、一一、二付）
5、青田ミヨ子（中町会第三）会員No.七六一（二〇、一二、二付）

速報

この度六月三十日付をもちまして理事会の総意により我らが理事長、吉永洲神先生が、社団法人日本吟道学院最高顧問に推戴されました。

真におめでとうございます。

広報局長

訃　報

一、宝方孝龍相談役（八王子教場）は、二十年八月十二日逝去されました。享年七十六歳（死亡叙位により龍孝）本会より、弔電・生花を供えました。

一、西本龍秀副会長は、二十年十一月二十五日逝去されました。享年七十一歳。
本会より弔電・生花・感謝状を供えました。
十一月初旬、ご本人から「年賀状に竹田恵子作ありがとうの詩文を入れたいのですが違反でしょうか。」との電話を受けました。「作者名を入れて詩文を記載する事は差し支えありません。」と答えました処葬儀の当日は既に賀状が出来上がっていた由。
そのような経緯から本会参列者一同で弔吟を捧げた後「ありがとう」の吟を龍暘会長が捧げました。
共に吟じた在りし日のお姿を偲びつつ謹んでご冥福をお祈りします。

西本龍秀さんに感謝

鷺宮教場　大塚　厚水

突然の訃報を伺い本当に驚きました、西本さんには昨年まで四年間若鷺教場でお世話になりました。いつもなにかひょうひょうとしてやせているけど忠の強い柳のような方のように感じていました。練習の前に必ずデカビタを飲んで元気を付け、あの甘いやわらかな声で「箱根路を」「武蔵野を讃う」「帰信吟」などいつも吟じておられました。

私の席は真向かいでしたので、西本さんのあの独特な間の取り方や大回しのドに下げるときの吟じ方などたくさん勉強させていただきました。時々おやじギャグを言ってご自分で笑っている、そんなおちゃめなところもありました。練習の帰り駅までの間に「何度もくり返していけば出来なかったところも出来るようになるよ、継続は力なり」とアドバイスして頂いたこともあります。温習会では必ずやさしく「良かったよ」と声を掛けて下さいました。

六月の総会で久しぶりにお会いできて元気なご様子にほっとしていたのに、残念でたまりません。未熟な私を励まし応援してくれた西本さん。詩吟を愛し南洲吟道会を愛した西本さんに感謝します。

合掌

詩吟は人生の新たなる生き甲斐

八王子教場　下津浦　誠

私は、東京医科大八王子医療センターに臨床検査技師として六十五歳の定年まで勤務、六十八歳になります。退職の一年半前にちょっとしたことから頚椎症性脊髄症の病気が発症し一週間の検査とリハビリで入院、退院後は半年位リハビリ療法を毎日二時間程度受けて痛みは改善しました。退院後は、リハビリストレッチ体操教室（週二回）、ラージボールピンポン（週二回）、指圧同好会（月二回）、ウォーキング毎日一時間位などでリハビリを兼ねた健康管理として参加を継続しております。

昨年九月のことでした。八王子市広報で「詩吟を楽しむ会」の会員募集を見てハッと思いました。スポーツ等の関係以外に趣味として永年続けられる「生涯の学習」はないかなぁと探していたところでした。詩吟は、漢詩・和歌・俳句等を学ぶことが出来、教養として身に付けることも出来、また腹式呼吸や大きな声を出すことにより大変健康に良いと聞いておりました。ちょっと気がかりなことは、高校の漢文教科は赤点で追試を受けたこともある苦手なものでしたので詩吟は果たしてやれるのかなぁと大変不安でした。が思い切って応募しました。ドキドキしながら入会初日の顔合わせには、私としました。ドキドキしながら入会初日の顔合わせには、私と同じような初心の方が六名もいて少しばかり安心しました。横山先生から「良くぞ大勢入会されました、大歓迎です。「袖すり合うも多少の縁」と言われますが、それどころかこれからは詩吟の勉強を通じて八王子教場と言うコミュニティーとして楽しくまいりましょう。」と挨拶があり一同ほっと気楽になりました。

続いて日本吟道学院の組織と詩吟を勉強する意義について詳しく説明がありました。北は北海道から南は鹿児島まで法人化された随分大きくて立派な会だなぁと驚きました。入会早々でしたが早く吟道界のことを知ろうと温習会（見学）と夏季大学に参加しました。出場者、参加者の皆さんが実に折り目正しく元気で、前向きに発表されている姿が素晴らしく、活気に溢れた大会の雰囲気を目の当たりにして感銘しました。今まで味わえなかった、素晴らしい吟道の世界に入れて、これからの人生に新たなる生き甲斐が生まれた事を喜んでおります。

初めての昇段審査では、やはり緊張してしまいました。理事長先生から短期間で初めてとしてはまずまず、と評価を頂き、詩吟を続けていけるかなと自信になりました。横山先生から、前身の八王子会は吟歴二十年近くのベテラン揃いで南洲吟道会の中でも名をなしていた。今は吟歴一年の皆さんが

中心の生まれ変わった八王子教場です。先輩達の伝統を守るよう頑張ってまいろうと励まされております。同期の人達とも気が合って教室が楽しみです。昇段審査も全部受験するつもりで頑張ってまいります。南洲吟道会の皆様、これからもよろしくご指導お願い致します。

日本吟道全国大会を終えて

座間教場　川瀬　龍慧

暑かった夏は去りいつしか冷気を感ずる季節になってしまいました。北海道全国大会も、早や一ヶ月余り過ぎ去りました。初参加させて頂きましたが、実はあまり乗り気ではなかったのです。岩井先生が、あまりにも熱心に勧めてくださり、熱心さにひかれて……

七月、八月、九月と、暑い盛り先生は痛い足をひきずり、電車を乗り継ぎ、私のために本部までご一緒させて頂きました。合吟は五人が心を合わせないと、練習も出来ないし、皆さん本当に一生懸命でした。これではいけない。心を一つにしなければと、緊張しました。参加するからには入賞しかない。初めて身を入れて練習してきました。皆さん一人一人が真剣でした。他の三人は平松玉龍・大塚優祥・大塚厚水の皆さんです。

当日は台風も過ぎ去り、秋日和に恵まれ、念願の三位入賞を果たし、一生に一度の喜びを味わいました。これもひとえに、理事長・会長を始め皆様のおかげです。メダルを眺めながら、今は感謝の気持ちで一杯です。本当にありがとうございました。

十有余年　座間会宮本教場

立野　裕城

師である祖母が吟じていた『偶成（朱喜）』を真似ることから始まり、ここまでおよそ十五年間吟の道を歩んで参りました。今思い返すと、ひた走って来たというわけではなく、ゆっくりと、そして幾度となく寄り道をしながらの歩みであった気が致します。何度も寄り道の方に流され、その度に吟（主に稽古）を疎かにしてしまった反面、どこに立ち寄ろうとも吟道やその根底にまつわる物事に関わらない時はなかったのではないか、と感じております。

昨年『大徳川展』という展覧会に足を運んだ折、展示されていた徳川斉昭（景山）公の龍笛を見ながら一嗚呼、これを手に『弘道館にて梅花を賞す』を詠んだのかも知れないなあ」その様な言葉が口を衝いていました。その時、横に居た友人から「詩吟を習っているだけあってそういうところに目がいくんだね」と言われ、今更ながら私自身の好きな物事の多くが詩吟を根底としているのだな、と気付かされました。幼い時分、男子特有の急激な声変わりを味わった際に、自信喪失から辞めようかと思ったこともありましたが、それを乗り越えてここまで続けて来たからこそ、先に挙げた様な言葉が自然と出たのだと思います。無論、寄り道をしつつもここまで続けて来られたのは、祖母並びに諸先生・諸先輩方の温かい御理解と御協力に拠るところがほぼ全てであると断言して差し支えないものであります。この場をお借りして心から御礼申し上げます。

南州吟道会の更なる発展を願って　二〇〇八年十一月

吟道千鳥足の記

三菱自動車吟道部　戸田　進祥

私は時々小学校時代の通信簿を思い出すことがあります。図画・工作は得意科目であり、音楽はいつも下位で苦い思い出が沢山浮かんでまいります。

絵を描いている時は我を忘れて夢中になり、先生に褒めれて得意になっておりました。「好きこそ物の上手なれ」とは言い得て妙の感があります。

一方、音楽は好きになれず、オルガンの横で歌わされる時も、どうしても音が外れてしまいます。教室に笑いが生じ、ますます音楽は嫌いになってしまいました。今でも人前で吟ずることは大の苦手です。

さて、そんな私が何故吟を習い始めたのかと申しますと、三菱自動車吟道部が発足（昭和五十八年七月）して間もない頃、会社公認の部として会社の補助金を得るためには部員数が不足している、だから是非と、当時の職場の先輩から誘われて、翌年一月に軽い気持ちで入部したというのが真相です。謂わば、自分は補助金を得るための数合わせで入ったといった意識でおりました。

以来二十四年間、音の世界が苦手で、入部の動機も不純な私がどうして吟を続けられたのか。思い当たる節を記してみます。

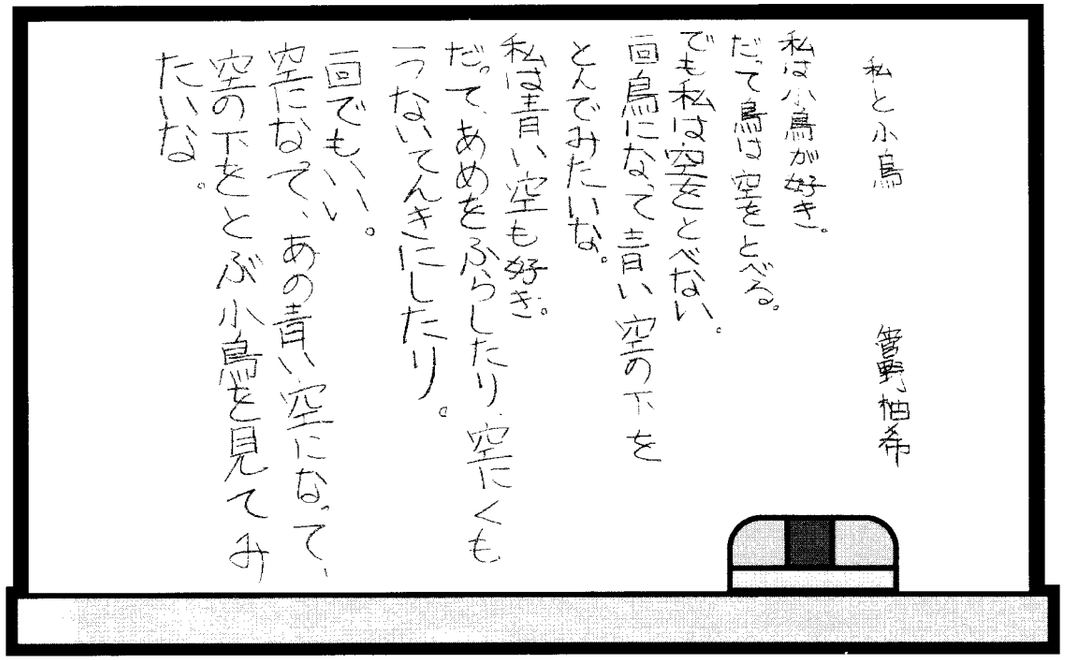
ひとつには、中学・高校時代に漢文の授業があって、漢詩に親しみが有ったということがあります。また、文学全般が好きな分野だったこともあります。

ふたつには、皆様と仕事を離れたお付き合いをさせていただき、取り分け「酒吟部」と称するお稽古後の一杯があって、呑兵衛の私には無上の楽しみだったことがあります。

そして、何よりも長きに亘って熱心にご指導をいただいてまいりました吉永洲神先生のお人柄に直接触れて共鳴、共感できたこと、これが一番の理由かと思っております。

詩吟を通じて、詩吟のみならず、先生の人生観から果ては天下・国家の事に至るまで談論風発、生き方の貴重な示唆をいただけましたことを本当に嬉しく思っております。

「生来の音痴はいない」という先生の言葉を信じて、吟が人生の生甲斐のひとつとなるよう、せめて「下手の横好き」の心境くらいには辿り着きたいと願っている今日この頃です。



編集後記

明けましておめでとうございます。

洲神理事長の巻頭文にも書かれていますように今年は南洲吟道会創立35周年記念の年です。

昨年12月20日に理事会が開かれ、理事の方々の熱心な話し合いのもと記念の会をどのようにするか大筋の幹の部分が決まりました。年が明け、早々に10月に向けて細かな枝葉をつけていかなければなりません。創立35周年記念の会を成功させるため会員一同一丸となって頑張っていきましょう。

普段感じていること・色々な情報等を積極的に広報誌に投稿をして下さい。よろしくお願い致します。

（広報局長）